

はじめに

平成16（2004）年度から平成19（2007）年度まで実施した科学研究費基盤研究（A）（海外学術調査）「日本水稻農耕の起源地に関する総合的研究」では、山東大学東方考古研究センターと九州大学考古学研究室との共同調査によって、東北アジアにおける灌漑農耕生成の起源地として山東半島とりわけ膠東半島を中心に調査を行ってきた。それは、楊家圈遺跡のボーリング調査や石器資料の悉皆的な実測ならびに古人骨の形質学的分析により、灌漑農耕起源地としての生成過程を明らかにしようとするものであった。さらに、この研究を通じて、東北アジア初期農耕化4段階説を提起し、寒冷期を起因とする小規模の農耕民の移住と在来の狩猟採集民の文化受容による農耕化の過程を、時空的に4段階によって説明し、日本における弥生文化の生成過程を明らかにしようとしたところである。また、この調査結果を利用して、1941年に日本学術振興会によって発掘調査された遼東半島の四平山積石塚の発掘調査報告書『遼東半島四平山積石塚の研究』（柳原出版）を出版した。さらに共同調査の成果は、『海岱地区早期農業和人類学研究』（科学出版社）と題して中国語で出版し、中国考古学界にも裨益したところである。

この基盤研究（A）では、山東省棲霞県楊家圈遺跡においてボーリング調査を行い、プラント・オパール分析から龍山文化期の畦畔水田が存在する可能性を想定した。この度の平成27（2015）～平成30（2018）年度基盤研究（B）「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」でも、楊家圈遺跡のボーリング調査を継続・拡大させ、水田域の広がりを明らかにしようとした。また、東北アジア初期農耕化4段階説を植物考古学的分析によって実証することを目指した。特に第2段階の稻作が膠東半島から遼東半島へ伝播する過程と第4段階である朝鮮半島南部から北部九州への農耕の伝播過程を明らかにすることを目的とした。そのため、土器圧痕レプリカ分析、炭化米の形態分析、炭化米のDNA分析、土器製作技術の分析などを実施し、多大な成果を上げることができた。特に、唐津市宇木汲田貝塚出土の炭化米や穀物の年代測定から、弥生早期の年代すなわち弥生開始期の実年代を確定できたことは、最大の成果であろう。

また、前回の基盤研究（A）では日照市兩城鎮遺跡のボーリング調査なども行ったが、今回の基盤研究（B）で、山東大学文化遺産研究院と九州大学人文科学研究院考古学研究室の共同調査を再開したことで、その成果を『東方考古』に発表することができた。

最後に、今回の基盤研究（B）で実施した調査・研究に参加いただいた国内の分担研究者各位ならびに九州大学大学院生と、巒豊実先生を始めとする山東大学の研究協力者さらに山東大学大学院生諸君に感謝申し上げたい。

2019年1月7日

九州大学人文科学研究院
宮本一夫